

Title	小都市ネッツィヒにおけるドイツの市民像：ハインリヒ・マンの長篇「臣下」について
Sub Title	Das Bild der deutschen Bürger in der Kleinstadt Netzig : Über Heinrich Manns Roman „Der Untertan“
Author	坂口, 尚史(Sakaguchi, Naofumi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.76, (1999. 10) ,p.281(92)- 294(79)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	黒岩純一, 平尾浩三両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00760001-0294

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小都市ネッツィヒにおけるドイツの市民像

——ハインリヒ・マンの長篇「臣下」について——

坂口 尚史

はじめに

Heinrich Mann (1871-1950)の代表作である長篇「臣下」(Der Untertan 1914年脱稿, 1918年発表)は、今世紀に発表されたドイツ語の長篇のうちでも上位にランクされる作品である。ドイツ語による十大小説に入るか否かは興味あるところである。最近 Deutschland という雑誌⁽¹⁾を読んでいたら Kultur の欄に Jochen Hieber という人が Jahrhundertromane: Von Musil bis Grass と題する一文を発表していた。それによると、ミュンヘンにある Bertelsmann と Literaturhaus (いずれも書店名)が、それぞれ異なる33名の作家, 評論家, ドイツ文学研究家に、今世紀にドイツ語で発表された長篇のベスト5を挙げてもらったという。その結果第1位(35票)が Robert Musil の「特性のない男」(Der Mann ohne Eigenschaften 1930ff.), 第2位(32票)が Franz Kafka の「審判」(Der Prozess 1925), 第3位(29票)が Thomas Mann の「魔の山」(Der Zauberberg 1924), 第4位(18票)が Alfred Döblin の「ベルリン・アレキサンダー広場」(Berlin Alexanderplatz 1929), 第5位(11票)が Günter Grass の「ブリキの太鼓」(Der Blechtrommel 1959)となっている。ハインリヒ・マンの作品はベスト5には入っていない。

そこで、20世紀ドイツ文学の長篇小説を集めたドイツ語の研究書にいくつか当たってみたところ、そのどれにもハインリヒ・マンが入っている。「ウンラート教授」(1905)を入れている本もあったが、Paul Michael Lutzeler 編 Deutsche Romane des 20. Jahrhunderts では23の長篇が選ば

れ、そこには前記5作のすべてと、「臣下」以下18篇が入っている。「臣下」の Neue Interpretation を執筆しているのはフランス人の故アンドレ・パニユル教授であった⁽²⁾。23篇のうち、今世紀前半に発表された作品が14篇、1951年以後に発表された作品は9篇となっていて、世紀の傑作はやはり今世紀前半に多く出ていることがわかる。この事情は「今世紀世界の十大小説」に拡大されても同じであろう。

23作のうちトーマス・マンだけは二作選ばれており、「魔の山」の他に「ブッデンプロック家の人々」(1901)も入っている。Hieber はやはり Buddenbrooks をとるべきだと主張しているがどうであろうか。またカフカについては「城」を入れるべきだという意見も紹介されている。この選択についてカフカ研究者におききしたいところである。トーマス・マンについては、その思想的な問題の扱い方とスケールの大きさにおいて、「魔の山」の方がいいのではないかと思う。筆者は「臣下」はベスト11-20の間に入ると予想しているが、この作品は「魔の山」の6年前に発表されている。弟トーマスは、イタリア人の人文主義者ロドヴィゴ・セテムブリーニの思想に、かの「文明の文士」の思想を、かなり強いイロニーをこめてとり入れたのである。「臣下」の発表当時兄弟はまだ対立の状態にあった。「魔の山」においてハンス・カストルプの個人的体験をテーマとしたトーマスとは異なり、兄ハインリヒにとって、1871年に成立し50年近く続いてきたドイツ帝国の市民のあり方がより大きな問題であった。ドイツ市民気質を検証した作品はドイツ文学としては少なく、「魔の山」における思想的対立(例えばナフタとセテムブリーニ)の構図に並ぶ迫力をもった、今世紀ドイツ語による小説の傑作に入ると思われるのである。

1

ドイツには珍しい社会を描く小説 Sozialroman をハインリヒ・マンはいくつか執筆している。ベルリンの金融資本社会を批判的に描いた1901年の「逸楽郷にて」、イタリアにおける市民像を描きつつデモクラシーを賛美した1909年の「小さな町」、そして今度はドイツの市民を見すえた「臣

下」へとつづいてきているのであるが、「臣下」はむしろ1905年の「ウンラート教授」と結びつけて考察すべきである。1929年の映画「嘆きの天使」(原題 *Der blaue Engel*) の原作として知られてはいるが、とくに傑作とは言えないこの小説は、リュウベックを舞台にしている点でトーマス・マンの「トニオ・クレーガー」(1903)とも共通点をもっている。ハンス・ヴィスキルヒェンは今年 Rowohlt 社から出した *Die Familie Mann* においてこのことを指摘している⁽³⁾。「トニオ・クレーガー」にも出てくる学校(モデルはリュウベックのカタリーネウム校)がテーマで、権威をもったギムナジウムの教授が、生徒達の悪行をたしかめようとしてかえって問題のキャバレー「青天使」の踊り子の魅力にとりつかれて没落する物語である。そこに「権威」(*Die Macht*)というモチーフが出ていた。このモチーフは「臣下」においてもっと拡大されて用いられている。

ちょうど「ウンラート教授」発表の翌年にハインリヒ・マンはハルツ山地のサナトリウムで将来の自分の小説の主人公を発見した。そのとき、「裸になって空気浴をしている人物」が目にとまり、すぐさま「臣下」と名づけられ、続いて彼をとりまくプロイセンの架空の都市ネッツィヒの人物たちが次々にでき上がっていった。Netzig という小都市は北ドイツにあり、今日のベルリンとマクデブルクの間あたりと想定してよいであろう⁽⁴⁾。

この小説の成立事情や、それまでのハインリヒの小説には見られなかったほどの爆発的な売れ行きについて、またクルト・トゥホルスキーの有名な評価については今回とくにふれない。「この本はドイツ人の植物標本室(Herbarium)である」というトゥホルスキーの標語は、当時としては先見の明をもっていたといえる。小論では主として、主人公ディーデリヒ・ヘスリング(Diederich Hesling 以下ヘスリングと表記)の人間形成と、ネッツィヒにおける他の市民との関係を中心に、作者が批判するウィルヘルムII世の「新時代」における市民像について考察したい。

まずヘスリングの人間形成について。ヘスリングは、作者と同じ頃1898

-1870年にプロイセンの小都市ネッツィヒに製紙工場主の息子として生まれた。この人物は学生生活後の第3章以後においてとくに、権威または権力を求める、machthungrigな人間として描かれ、周囲の多くの人物たちともども、なかなか民主主義を実現できないドイツ的な性格をもつとされる。小説の時間は1890年から1897年のウィルヘルム I 世百年祭までの帝政後期なのであるが、権威に弱いドイツ人の性格が作者の鋭い人間観察によって予言的に現れており、その後の1920年代以後のなりゆきが作者の予言どおりに進行したこともあって、第二次大戦後もドイツ人の性格を考えるとき大いに参考にされている。

もともとヘスリングはひよわな子供であり、弱虫 (Schwachling) であった。しかも臆病で偏狭である。一方立ちまわりがうまく、権力にとり入るのが上手である。小説の第1章と第2章は、このようなマイナスの面をもった主人公の人間形成がどのように行われたかを入念に述べている。彼にとって恐ろしい力をもった存在が沢山あった。それらは父親であり、読書の際に彼の空想の中に現れるひきかえるや城の幽霊であり、警官であった。そして、「それらすべてのものよりもさらに恐ろしい、人間を一息に飲み込んでしまう『学校』」⁽⁵⁾という組織の中へ彼は入る。自分の泣き癖を見抜くような鋭い教師には絶対に服従した。彼にはギムナジウムという全体、「この非個性的な全体、容赦なく、人間を軽蔑する、機械的な組織に自分が属しているということ」⁽⁶⁾に喜びを感じる傾向があった。のちに大学生となって、当時ドイツ帝国内にあったノイトイトーニアという学生組合⁽⁷⁾において感じる喜びもこれと同種である。学校において、権力者 (教師) が認めてくれれば、クラスの中のユダヤ人少年いじめもやってのけた。このエピソードは第1章の中でも特に印象に残るものである。教壇に立てた十字架の前にユダヤ人少年をひざまずかせて、おさえつけるという、通常感覚ではやってはいけない行為も、多数のクラスメートの指示があれば、彼にはやっていいことになる。当時プロイセンには1割ほどのユダヤ人生徒がいたというが⁽⁸⁾、ネッツィヒのキリスト教徒の支持があるので、責任や罪の意識は一人で背負うことにはならない。

Wie wohl man sich fühlte bei geteilter Verantwortlichkeit und einem Selbstbewußtsein, das kollektiv war !

責任を分かちあい、集団となって罪の意識をもてば、何と快適であることか！⁽⁹⁾

この一文には、作品全体の重要なテーマの一つが包含されている。アンドレ・バニユルは、「臣下」に関する論考を、今世紀初頭のニュースから説きは始めている。北京―パリ間を自動車でという無鉄砲な企画が出て、何人かのフランス人がドイツに来てドイツ人やドイツの町と交流した。この走行のパイオニアたちはドイツで熱狂的に迎えられ、その数は国民の三分の二に達した。このような歓迎こそ、ハインリヒ・マンによれば愛国的ショーヴィニズムの力の誇示および「臣下」のそれであって、断固拒否すべき傾向なのである⁽¹⁰⁾。三分の一の国民からフランス人たちは全く歓迎されなかった。「臣下」は元の名を、「ウィルヘルムII世治下における公的人間の物語」と称したが、作者はこの三分の一の人たちこそが、国民の舞台を支配してほしい、そのような意図でもって書かれたのが、小説「臣下」なのだと言バニユルは強調している⁽¹¹⁾。「異なった考えの人は国民の敵と呼ばれるべきです。たとえ彼らが国民の三分の二であったとしても」⁽¹²⁾と、ヴォルフガング・ブックが語っているところ（第4章）は作者の意見なのである。

Der Untertantyp の人間は国民の三分の二の中に存在する。1906年、ベルリンのウンター・デン・リンデンのカフェに座って、群衆をみつめていたハインリヒはそのことを感じていた。それらの群衆は品位を欠き、臆病なようにみえた。皇帝ウィルヘルムII世が馬に乗って通り過ぎたとき、群衆はどっとショーウィンドウのガラスに押し寄せて店を破壊した。皇帝は悠々と通っていった。この光景は強く著者の心に残り、作品の第1章末尾における、ヘスリングと皇帝のはじめての出会いの場面に生かされた。小説において、帝国の臣下というマイナスの意味で興味深い人間のタイ

プ⁽¹³⁾、責任感をもたない狂信的な愛国主義者、大衆の中に消え去っていく権力崇拜者、より良き良心をもたない権威の信奉者がテーマとなった。

ヘスリングはしかし、最初からこのような臣下の資質をもって生まれてきたのであろうか。第1、2章をよく読んでみると、必ずしもそうとは言えない面がある。ギムナジウムを普通の成績で卒業したヘスリングは、首都ベルリンの大学に入り、化学専攻の学生となる。一地方都市の出身である彼は大都会になかなか馴れなかつたのであるが、故郷の父の友人でベルリンに住むゲッペル氏が彼の力になってくれる。その娘アグネスはヘスリングの生まじめな性格に親しみを感じ、自宅に下宿させている遊び人のような学生マールマンよりも彼の人間味を認めた。アグネスは、マイナーの人物が多く登場するこの小説には珍しい、その名の示すとおり純潔の人⁽¹⁴⁾であった。彼女のような人を選んでいたら、ヘスリングは市民としてもっと大切なものを得られたかもしれない。しかし彼にはアグネスの真価が分からなかつた。

第2章のアグネス・ゲッペルとヘスリングの関係は、「臣下」の解釈において見過ごされがちな部分である。愛を知るということは、ドイツの伝統的な Bildungsroman においても人間形成の最も大切な部分である。ドイツの教養小説との関係からいえば、教養小説の陰画のように構成されているこの作品に見ても、愛の成就の可能性はヘスリングに対してちゃんと提供されている。ゲッペルの過程は、ドイツ市民の最も良いところを代表しているので、ヘスリングの知るそれまでの環境とは全く違っていた。彼は後に故郷に帰ってよくしたように大言壮語する (renommieren) 必要がなかつた⁽¹⁵⁾。アグネスも男性に名誉や地位を要求しないし、しとやかで謙虚であった。ここで彼はもっとこの家庭の長所をとり入れて、menschfreundlich な人間になるべきであつたらう。

第2章における彼の生き生きとした、人間らしい告白は、その後の彼の生き方からは考えられない寛容の精神を備えている。アグネスの自分への愛をたしかめて、「彼は自分が全く変わってしまったように、また地面から持ち上げられたように軽くなったように思った。『僕はとてつもなく幸

せだ』、『一生のうちでもこんな幸せは二度とやってこない』と思った。自分はこれまで物事をまちがって見ていたし、判断も狂っていたのだと確信した。向こうではみんな酒を飲んで偉そうなことを言っているんだろう。ユダヤ人であろうが失業者だろうが、僕になんのかかわりがある。なぜ彼らを憎まなければならないのか？ ディーデリヒは彼らを愛そうという気持ちになっていた。』⁽¹⁶⁾

アグネスへの愛と、それに伴う価値転換の試みは彼の真剣な心情であり、決してイローニッシュな、風刺的な描写ではない。アグネスとの恋愛関係はひょっとして彼を権力志向から引き戻したかもしれないのである。しかし、結果として彼は大学における学生組合での人間関係の方を重視した。このことはまさに彼の人生の転機となったのである。

2

読者には、ヘスリングが善良な市民の一人なのであり、感受性の豊かな人間であることがわかっている。だが、彼は大学生活を終えて故郷の町ネッツィヒに戻ると、大学時代の恋愛体験も忘れて、この町で勢力をひろげて影響力を拡大し、ささやかな製紙工場主から政界に出ようと試みる。第3章から第6章までヘスリングを中心に、ネッツィヒを誰がどのように支配していくか、そこにどのような対立葛藤が生じたかを描くことに作者の努力が集中する。そしてそれらの市民像からドイツ帝国のあり方に対する作者の批判が浮き出てくる。ヘスリングはネッツィヒの最も立派な人老ブックの名誉を傷つけ、ユンカーであり市の政府長官 (Regierungspräsident) であるヴルコーにとり入り、反ユダヤ主義を唱えるユダヤ人ヤードスゾーンと陰謀をめぐらせ、労働者ナポレオン・フィッシャー (彼は社会民主党の意見を代表している) をうまく自分の陣営に取り込む。その過程を7つの項目にまとめてみると、1. 亡き父から製紙工場を引き継ぐ。2. 「皇帝党」の人々や、在郷軍人会、教会、検察庁といった保守派の人々との提携。3. 資産家の娘グステ・ダイムヒェンとの結婚。4. 政府長官ヴルコーとの協定。5. それと対立するナポレオン・フィッシャー

との協定。6. 市会議員選挙に出馬。7. クリュージング製紙工場を買収、という順番になろう。最後は1897年ウィルヘルム I 世百年祭における記念像の除幕式での勝利の演説を行っている。第一次世界大戦までは、まだ少し年数があるが、大戦を引き起こした状況が、ドイツ国内で進行していた競争資本主義から独占資本主義または帝国主義への移行を背景に明らかにされている。1915年にハインリヒ・マンは、「臣下」について、「主人公ディーデリヒ・ヘスリングが、ヨーロッパに対するドイツの戦争という最終結果を体験することになろうとはまだ思っていなかった」⁽¹⁷⁾と書いている。しかし今日の我々から見れば、ヘスリングは皇帝ウィルヘルム II 世を尊敬し、皇帝による第一次世界大戦と、その残虐行為を是認する人間たちの一人であると思われ、多数派を代表しているのである。

「臣下」に支配されている小都市（それはまたドイツ帝国の縮図でもある）の状況を、ヘスリングと老ブックとの関係、およびヘスリングと労働者ナポレオン・フィッシャーとの関係にしばって調べてみよう。

まず老ブック (der alte Buck) であるが、彼は小説の始まりにおいて、裕福な名望ある人物として、「ネッツィヒの偉大な人物」として紹介される。その息子のヴォルフガングがヘスリングと同世代であることを考えると、1825年頃の生まれとなる。彼は自由主義者であり、1848年の革命でいったん死刑の判決を受けたが、詩人ゲオルク・ヘルヴェーク (1817-75) と同じように生きのびて、90年代のはじめになってもなお、フランス革命の理念である、「自由、平等、博愛」を信じている。彼にとっては権力ではなくモラルこそが、政治の指導理念として浮上してこなければならない。しかしそのモラルを広める前に彼は自分に向けられた陰謀にかかって名誉を失墜させられ、名声を失って、小説の最後では政治的になんら影響力を発揮できない人物になってしまう。

ヘスリングと老ブックとの最初の出会いは第 1 章におけるヘスリングの父の葬儀においてであった。市の名士として弔問に訪れた老ブックは、まだ大学生であったヘスリングに向かって、「あなたの父上は立派な市民だった。若い方、あなたも父上のような人間になって下さい。あなたの同胞

(Mitmenschen) の権利をいつも尊重して下さい！ と言って激励した⁽¹⁸⁾。

次に第3章で、故郷に帰ったヘスリングが自ら老ブックをたずねる場面がある。ブックがヘスリングを市の参事会員 (Magistrat) に迎えるつもりであることをきいて喜んだヘスリングは、こともあろうに “Ich bin selbstverständlich durchaus liberal.” と叫び、その後1848年の革命のときの体験談をきいている。老ブックはここで、「ドイツ国民には政治的な教養がない、他のいかなる国民に比べてもない。そのため、飛躍のあとにもう過去の権力のおちてしまうという決まりになっている」と語っている⁽¹⁹⁾。老ブックはもう死去したヘルヴェークを尊敬しており、1871年の春に、ドイツ帝国が成立したばかりのとき、ヘルヴェークが叫んだ言葉を引用した。——Ihr wähnt euch einig, weil die Pest der Knechtschaft sich verallgemeinert! (奴隷根性というペストがひろがっているから、君たちは統一したと言っているのか!) ブックは皇帝に対する die Knechtschaft が蔓延していると警告している。ヘスリングにはそれが「あの世」からきこえてきたような気がして口ごもってしまう。ブックはまたビスマルクを必ずしも賛美しない。ビスマルクは主君 (ウィルヘルム I 世) の名において統一をやりとげたにすぎない。1848年3月革命のときの市民の方が立派であったとしている。

次の第5章においては、両者の関係は、裁判の後だけにかなり緊張してきている。ヘスリングは老ブックの娘婿ラウアーの名誉失墜に加担した。老ブックはヘスリングの行動を糾弾せず、「あなたは若いのだし、多分今日の精神が属している内的な動因にしたがって行動しているのでしょう」と述べて⁽²⁰⁾、寛大な態度を示し、さらに市議会議員に出るのなら力になろうとまで言ってくれた。ヘスリングは相手の行為をどう受け止めるべきか迷っている。老人の話の中に、市門の壁龕に立つ鉄の騎士ドン・アントニオ・マンリーケの話がある。30年戦争の時代にネッツィヒの町を焼きはらった恐ろしい騎士団長であるが、市民の自由意思を尊重せずこれを抹殺しようとしているフォン・ヴルコー長官と似ていないだろうかとブックは

問いかけている。

第6章にくと両者の関係はもっと険悪になり、ヘスリングは露骨に老ブックを追いおとしにかかる。国会に送る議員1名を選ぶ選挙が近づいてきて、大きな公的な市民集会在が計画され、Walhalla という名の大会場に選挙委員会が市民を召集した。この集会的の修羅場のような描写の前に、ヘスリングがもう一度アグネスのことを回想する文が挿入されている。「彼女は彼にとって一生でただ一つの真実だった。」⁽²¹⁾肯定派は、自由陣営を目の仇にして巻き返しをはかっていた。奸計をめぐらせて報道機関を抱き込んだヘスリングは権力に近づいていた。「私は権力を取った」(Man ist eine Macht) と彼は自信をつけて市民集会上に臨む。老ブックも席についていた。ところがヘスリングは労働者のナポレオン・フィッシャーとその仲間たちにとり囲まれつかまってしまう。彼は老ブックに助けを求める。老ブックは人がいいので、若い人を数人やって救出してやった。それなのにヘスリングは、衆人が見守るなか老ブックを指して「民主主義の腐敗墮落」⁽²²⁾を攻撃しはじめる。ここから両者の最後の攻防が始まる。皇帝派の応援を受けているヘスリングに対し、老ブックはもはや以前のような気品にみちた老人ではなかった。憎悪のため顔は青ざめていた。老ブックは叫んだ。

Er soll sprechen! Auch Verrater haben das Wort, bevor sie abgeurteilt werden. So sehen die Verrater an der Nation aus. (彼にしゃべらせよ! 裁かれる前に叛逆者の言うこともききたい。国民に対する叛逆者はこのようにみえる。)⁽²³⁾

しかし、1848年の革命の闘士の主張を真剣にきこうとする市民はいなかった。新時代の「名誉を捨てて利益を選ぶ」ドイツ市民は40年前と同じようにやはりいたのだ。良心の最後の叫びを放った老ブックは議長席を離れ、市民たちに背を向け、ただ一人誰も見ていない方向をみつめて涙を流していた。集会的の最後で彼は失神して倒れる。

以上、ヘスリングとブックの出会いから対立関係までを順を追って概観してみると、旧世代の没落と新世代の台頭という構図がわかる。そして老ブックの意見の中に、ドイツ国民の三分の一に属する作者の、ウィルヘルムII世の「新時代」に対する批判が含まれていることは見逃せない。

次ぎにもう一人、労働者で、プロレタリアのナポレオン・フィッシャーとヘスリングの関係を順を追って見ておきたい。作者の「新時代」への批判は、愛国的で皇帝を尊敬する右派に対してと同様、社会民主党に代表される左派に対しても向けられている。両者はまず第3章において対決する。自分の工場の人間が社会民主主義者だときいてヘスリングはすぐに彼を解雇しようとするが、工場の老簿記係ゼートビールにとめられる。あの男を解雇したら全員にやめられてしまうと彼は言い張った。このエピソードからヘスリングがここでは社会民主主義者を敵視していることが明らかになる。

第5章では、工場で働く14歳の女工が鉄のローラーに腕をさらわれてけがをした事件の処置をめぐる、ヘスリングが機械主任のフィッシャーと二人だけで話し合っている。損害賠償を多く請求されると困る話や、フィッシャーが労働者をけしかけないようにと、ヘスリングは金貨を与えてフィッシャーを黙らせようともくろむ。金貨は拒否したが、損害賠償の件は言わないとフィッシャーは約束した⁽²⁵⁾。

同じ第5章の別の場面では、市会に出馬する意向のヘスリングがフィッシャーを私室に呼んで、彼を味方にひき入れようとしている。選挙では社会民主党と自由主義陣営が議席を分け合うだろう。フィッシャーは社民党から出て、ヘスリングが自由陣営から出て勝てるかどうかわからないので、立場のちがう相手に票集めを依頼する。そのためには労働会館の費用集めにも協力せざるをえなくなった。社会民主党も勢力を伸ばすためにかなり無理をしなければならない。自由派 (die Freisinnigen) よりは、「愛国派のばか騒ぎ」(der nationale Rumel)の方が利用価値があるとフィッシャーは考えている。「市民的民主主義などはすぐにでも、一台の辻馬車に乗って出て行け」とは、ヘスリングではなくフィッシャーの言葉で

あることに驚かされる⁽²⁶⁾。第6章では事態がさらに複雑化している。皇帝党(Die Partei des Kaisers)の社会民主党に対する風当たりが強くなりだして、フィッシャーは困っている。ヘスリングはその対策に乗り出す。フィッシャーは上手に、老ブックに対するヘスリングの憎悪を煽り立てる。そして最後が先にも述べた国会議員を選ぶ選挙を前にした市民集会の場面となる。ナポレオン・フィッシャーは自ら労働者の代表として国会議員に立候補し、ホイトイフェルとの決選投票を控えている。市民集会での大激論と、皇帝党の集会を経て、ナポレオン・フィッシャーがついに国会議員に当選するのであるが、それにしても何という不透明な経過であろうか。自由陣営をうち破るために、ヘスリングが老ブックを攻撃し、「皇帝党」の人が多数フィッシャーに投票した結果、ホイトイフェル候補は敗れ去ったのである。

このような経過で選出された社会民主主義者、フィッシャーに人々は本当に未来を託すことができるであろうか。大いに疑問を感じざるをえないように作者は社会民主主義党員を登場させている。完全な「ゆがんだ姿」となっているフィッシャー像については、作者自身が社会民主党の目標についてよく知らなかったのではないかという批判がある一方で、労働者階級に対する作者のシンパシーの表現だとする評価もある⁽²⁷⁾。

フィッシャーが頼りにしたヘスリングも、何らかの確固たる政治信念をもって皇帝党を支持しているのではない。彼の友人ヴォルフガング・ブックが工場主ラウアーに対する不敬罪訴訟の被告人弁護でヘスリングについていみじくも述べている。「彼は普通の悟性をもった平均的な人間です。環境とチャンスで動かされる人間です。事態が悪いときは勇気をもたず、形勢が変わるやいなや大きな自信をもってくるのです。」彼は北ドイツの架空の都市の市民であるが、弁護士ブックの意見にしたがえば、現代の人間にも当てはまることではないかと思う。20世紀のドイツにおいてもヘスリングは生きつづけた。ワイマル共和国においても、老ブックの言葉ではないが、国民的に政治的教養がなく、Republikがあるのに Republikanerがほとんどいかなかった。このためナチス党に国を任せて、ドイツはまた世

界の強国への道を歩みはじめたのである。

今年はドイツ連邦共和国が成立して50年であるが、ハインリヒ・マンが「臣下」で示してくれた教訓を生かして歩むことを祈りたい。(1999年7月)

注

- (1) Deutschland—Zeitschrift für Politik, Kultur, Wirtschaft und Wissenschaft. Nr. 2/99 Frankfurt, S. 61
- (2) Deutsche Romane des 20. Jahrhunderts, Neue Interpretationen, Hrsg. von Paul Michael Lützeler 1983 Königstein, S. 78-94.
- (3) Hans Wisskirchen: Die Familie Mann, Mai 1999 Reinbek bei Hamburg, S. 47 f.
- (4) Erläuterungen und Dokumente Heinrich Mann: Der Untertan, 1993 Stuttgart, S. 8 (レクラム文庫)
- (5) Heinrich Mann: Der Untertan, 1991 Frankfurt am Main, S. 12 (以下略して U S. 12と示す) テキストには Fischer Taschenbuch 版の Heinrich Mann, Studienausgabe を使用した。小説は全6章から成る。このシリーズは現在27冊ほど刊行されている。
- (6) U S. 13
- (7) レクラム文庫版の Neuteutonen の注釈によると、学生組合には社会的機能があって、それは市民気質の「封建化」(Feudalisierung) であったとしている。前掲書11頁。
- (8) Erläuterungen und Dokumente, S. 8. プロイセンの学校においてユダヤ人生徒の占める割合は1880年代のはじめて10.1%, 1890年代では8%であった。
- (9) U S. 15
- (10) Andre Banuls: HM: Der Untertan (1914-1918). In: Deutsche Romane des 20. Jahrhunderts, S. 78
- (11) Andre Banuls: HM: Der Untertan (1914-1918). In: Deutsche Romane des 20. Jahrhunderts, S. 78
- (12) U S. 237
- (13) der widerwärtig interessante Typs des Untertanen
- (14) Agnes は die Keusche, Reine を意味する。Erläuterungen und Dokumente S.11
- (15) この作品には、皇帝の演説などからとられた大げさな表現 (Bramar-

basieren) が演説などに多く使われている。人間の愚かさに対するフロベール風の偏愛であると、バニユルは述べている。アグネスに対するマールマンの言葉にもそれが見られる。一家で動物園に行ったとき、アグネスはマールマンの見栄っ張りは嫌いだと言った。U S. 27

- (16) U S. 71
- (17) Wolfgang Emmerich: Heinrich Mann "Der Untertan" 1980 München, S. 59. この小説の構造を解明した代表的な研究書である。(Uni-Taschenbücher 974)
- (18) U S. 46
- (19) U S. 118
- (20) U S. 299
- (21) U S. 402
- (22) U S. 410
- (23) U S. 410
- (25) U S. 266-269
- (26) U S. 323
- (27) Erläuterungen und Dokumente, S. 27

(終わりに) 黒岩純一先生のご退職にあたり、先生が今後ともお元気でカフカの作品について研究を続けられますようお祈り致します。リューベックの Buddenbrookhaus は Heinrich- und-Thomas-Mann-Zentrum に変わり、1997年から Heinrich Mann Gesellschaft ができましたので会員になりました。